

本書は、中国「昆明理工大学省級人材培養項目－漢方医北山寿安与中日医薬文化交流」（項目番号：KKSYS201954032,2019RP03）」の支援を受けたものである。（中国昆明理工大学 2019 年度人文社科研究基金－省級人材培養項目 “汉方医北山寿安与中日医药文化交流” 研究成果、項目批准号 KKSYS201954032,2019RP03。）

江戸の漢方名医 北山寿安の思想研究

洪 涛
HONG Tao

クロスカルチャー出版

矢嶋道文 監修
洪 涛 著

江戸の漢方名医 北山寿安の思想研究

クロスカルチャー出版



洪涛氏『江戸の漢方名医 北山寿安』刊行に寄せて

関東学院大学名誉教授 矢嶋道文

洪涛氏が関東学院大学の門戸を叩いたのは今から10数年前のことである。紹介者は埼玉りそな銀行、しまむら、三井住友海上女子駅伝チーム元監督の吉田富男氏である。私が関東学院大学陸上競技部の元監督を務めていた関係で洪涛氏を紹介して来られた。吉田富男氏は元順天堂大学陸上競技部（駅伝チーム）の主将で、箱根駅伝1区の区間賞受賞者である（チームは総合優勝）。10数年前の洪涛氏は、中国昆明に在住し、女子駅伝チームの通訳として活躍していた。中国昆明は高所にあり、女子駅伝の練習コースとしては最適の環境にあった。

関東学院大学では大学院文学研究科博士前期課程（修士課程）に入学、日本の文化（祭りの経済効果）、港湾の文化経済効果（学長賞受賞・小林照夫現名誉教授指導）、を学んだ。その後一旦帰国するが、再来日し同研究科博士後期課程に入学、矢嶋の下で近世江戸の漢方医を学んだ。矢嶋は折から北里研究所（北里大学）「東洋医学総合研究所」（元医史学研究部部长小曾戸洋教授）に師事する目的で同研究所に国内留学した。留学期間は短かく漢方の基礎を学ぶには余りにも期間が不足していた。そこで、門戸を叩いたのが「一般社団法人日本漢方協会」である。ここでは「漢方総合講座」（年間）における学術委員による講義、専門医による講座（臨床）などが有効であった。また、講座終了後の分科会（矢嶋は「神農本草経」分科会）に参加した。

洪涛氏は、その間に矢嶋の研究室に入り、自ずから日本漢方協会の「漢方総合講座」と分科会を受けることになった。洪涛氏は、月一度の講座を休むことなく続け、漢方の基礎を学んだ。人柄もあり、日本漢方協会の理事の皆様には心底可愛がられた。帰国が決まり、いよいよ



出典：大阪市天王寺区夕陽丘1-1 太平寺に鎮座する北山寿安石像（2015年9月11日撮影）

よお別れといった際には、有志（同一メンバー）による送別会が2度行われたほどである。

洪涛氏による北山寿安研究は緒に就いたばかりではあるが、これまでに不明であった点がいくつか解明されており、長大な臨床（訳文）紹介と合わせ、4章構成の本書を通じ北山寿安の総合的輪郭（北山寿安像）は残せたのではないかと思う。矢嶋は寿安と年代が重なる貝原益軒（1630～1714）を学んでいるが、明末・清初の中国医薬学が政治的混乱期にあり、それが日本への大きな影響を与えたことを重ねて本書から知らされた。洪涛氏もいうように、この時期は日本医薬学にとっての「文化的・精神的な自立過程」であったのである。

本書には、可能な限りでの専門書を注にあげてはいるが、論述とも必ずしも十分ではない。その点、洪涛氏が大学院在籍中（学部科名は比較文化学科）に学んだ「比較文化」の文字を念頭にご一読いただければ幸いである。

江戸の漢方名医 北山寿安の思想研究

洪涛氏『江戸の漢方名医 北山寿安の思想研究』刊行に寄せて

はじめに 一本書の意図一

序章 先行研究と本書の構成

第一節 先行研究

第二節 本書の構成

第一章 北山寿安の生きた時代背景

第一節 明末期の中国医薬学

第二節 江戸前期の日本漢方

小 結

第二章 北山寿安の生い立ち

第一節 寿安に関するいくつかの疑問とその解明（生年と名前の間違い）

第二節 長崎の居住時期（長崎唐通事との関わり）北山寿安一家と長崎唐通事

第三節 大坂での活躍

小 結

第三章 北山寿安医学知識の形成過程

第一節 父馬栄宇からの薫陶

第二節 北山寿安の師

第三節 福建地方閩医学の影響

小 結	100
第四章 北山寿安の著作にみる漢方思想	
第一節 『北山医案』 解説と解説	105
第二節 『医方考繩愆』 解説と解説	283
第三節 『増広医方口訣集』 解説と解説	313
第四節 小 結	365
むすび 北山寿安研究の意義と課題	
(一) 北山寿安の後継者について	367
I 北山寿安の子孫	367
II 北山寿安の門人	370
(二) 北山寿安研究に残された課題	372
北山寿安略年表	375
参考文献	376
(謝辞)	387
索引	389

はじめに 一本書の意図一

江戸時代、鎖国下においても大量の中国薬草、医薬書籍が長崎を通して日本に運ばれた。それと同時に、多くの「唐人医師」と呼ばれる中国人医師も来日した。彼らは日本各地で医療活動を行いながら中国の医薬文化を伝えた。唐人医師の協力の下で、多くの中国医薬書籍が翻訳・編纂・研究され、漢方医学の発展に大きな役割を果たした。1624年前後、来日した中国福建出身の馬栄宇はその一人である。

馬栄宇の長男である北山寿安は、当時、「浪花随一」¹の漢方儒医²として長崎や大坂で活躍し、江戸前期から中期にかけて漢方医学界に大きな足跡を残し、漢方医学の発展に尽力した。菓の間屋町といわれる大阪道修町の町名由来は彼とかかわり、幕末には法眼の地位を得た浅田宗伯（1815年～1894年）の墓石の傍らに不動明王像が設置され、寿安にあやかってのものといわれる。このような功績を挙げた北山寿安に関する研究とその評価は管見の限りでは、きわめて少なく、彼の日本漢方への影響・役割、医学理論・思想などの研究も、十分なものとは言えない。

本書では、北山寿安に焦点をあて、多数の史料を読み解くことで、寿安の生きた時代背景、在日医療活動、医学思想の形成、医学著作を四章に分けて探ってみた。それを通して寿安の漢方医学史上の位置づ

¹ 浪花は難波、浪速、浪華ともいう。大阪市の古名、一般に大阪のこと。上町、台地北部一帯の地域を指した。多くのものの中の第一位、第一番のことである。（松村明編『大辞林』三省堂、2006年）を参照。

² 儒医（じゅい）とは儒者と医者兼ねている人のこと。読書人出身の医者・学問のある医者ともいう。（薛公忱『論医中儒道佛』中医古籍出版社、1999年）を参照。

け及び彼の医学思想を明らかにした。とくに寿安の業績と言われる『北山医案』については、その現代語訳と解説を施した。その臨床実態を分析し、寿安の生涯にわたる全貌とその医学思想を具体的にアプローチすることにした。

北山寿安の医学思想といえは、一家の医説にかかわらず、医学古典や先人の貴重な体験をうまく吸収した上で独自の医術を開拓したことが特徴である。治療にあたっては、諸家の優れた点を取り入れて臨機応変に行う。名利を求めず、貧しい人には治療費を取らずに米銭までもも与えた「医は仁術なり」を実践し、「医德」も多くの好評を博した。

北山寿安の生年及び彼の長崎や大坂での医療活動については、いまだに解明されていないところが多い。今回の研究では、彼は1632年前後に生まれた可能性が高いと推測した。研究史では、北山寿安の名前は「北山寿庵」「北山道修」「北山道長」「北山友松子」など多く記されるが、このうち、「北山寿庵」と「北山道修」は寿安ではなく、孫の名前であることを明らかにした。

寿安の医学思想については、いまだ論究の及んでいない点があるように思われる。とくに、長崎での成長経歴、大坂での具体的な医療活動、福建地方閩医学は彼の医学思想にどれほど影響を与えたかなどは、今後の重要な検討課題としてあげられる。本研究では、伝統医学「漢方」の基盤的思想を明確にし、現代医療におけるその存在意義を改めて考える素材を提供したいと思う。とくに北山寿安の診療記録及び事跡を検証することは、研究史的にも意義深く、さらに究明する可能性があると考えられる。

北山寿安（1632年前後³～1701年）は江戸前期から中期にかけて

長崎や大坂で活躍した「浪花随一」といわれた漢方名医である。周知のように漢方は中国古代黄河流域の漢民族医学を源流とし、5世紀頃朝鮮半島を経由して日本に伝来した。江戸時代になると日本の風土に適した医学システムとして発展を遂げたといわれる。⁴江戸時代、鎖国下においても長崎は対中貿易・交流の唯一窓口として漢方医学の発展に大きな役割を果たし、大量の唐薬（中国の薬草・薬種）、医薬書籍などが唐船（中国商船）により、長崎に運ばれてきた。⁵それと同時に「唐人医師」と呼ばれる中国人医師も唐船と共に長崎に入った。彼らは日本各地で医療活動を展開しながら数々の中国医薬書籍を翻訳・編纂・研究して日本漢方医学の発展に大きな役割を果たした。北山寿安の父馬栄宇（生年不明～1654年）、師匠戴曼公（1596年～1671年）はその中の代表としてよく知られている。⁶

寿安は薬種商として来日した父馬栄宇と長崎丸山の遊女との間に生まれた子である。唐人出身の父は先祖代々、漢方専門の医者であり、寿安は幼い頃から父に薬草の知識の薫陶を受けていて漢方医学に親しんだ。とくに取り上げたいことは、彼が古今の医学書『黄帝内経』・『難経』・『傷寒論』・『金匱要略』などを隅々まで読み、いち早く当時の最新医療情報及び「李朱医説」⁷を熟知し、その影響を受けて医学

³ 北山寿安の生年について本書の第一章第二節「北山寿安について」を参照。

⁴ 小曾戸洋『新版漢方の歴史』（大修館書店、2014年）、富士川遊『日本医学史・決定版』（形成社、1974年）を主に参照。

⁵ 羽生和子「江戸時代における輸入漢薬の流通について」（『日本医学史学雑誌』第52巻第1号、2006年）を参照。

⁶ 真柳誠「日本と中国・朝鮮間の医学と文献の交流—13世紀以降—」（第6回国際東洋医学会、1990年11月19-21日、東京に於いて）を参照。

⁷ 中国金元の時代の医師李東垣と朱丹溪の医学理論・医説を李朱医学という。

古典や先人の貴重な体験を上手に吸収し、諸家の優れた点を取り入れ臨機応変に、あらゆる学派にもとらわれなかったことである。「世の中は古今で異なり、各地の風土もさまざまで、古人の天賦の才にも差があるので、もし古方をおおむね修めて今の病気を治れば予期せぬ効果が現われる。古方については時・場所・人によって用いるのが肝要で、そうすれば有効的に実際の病状に合う処方ができる」という考えを表した寿安は多くの好評を博した。幕末から明治にかけて活躍した最後の漢方医とも称される、徳川将軍家の御典医、明治天皇の侍医となった浅田宗伯（1815年～1894年）は、著作『皇国名医伝』と『先哲医話』などに北山寿安のことを紹介した。その紹介文から浅田宗伯は北山寿安の医術を非常に尊崇することがわかる。⁸ 浅田宗伯は亡くなる三日前に、弟子に命じて自分の胸に「寂然不動」と墨で書かせたという逸話が流れているが、真実かどうかは検証できない。しかし、東京都台東区にある谷中霊園に浅田宗伯の墓石がある。その墓石の傍らに不動明王像が設置されている。なぜ不動明王像を設置するか理由は不明である。寿安はかつて紀州侯の病を治した謝礼の受け取りを断って、代わりに持ち帰った庭石を、不動明王の石像として安置し、この不動を墓標として、自身はその下に入定するという逸話もある。現在、大阪の禅宗寺院太平寺の境内に即身成仏し、葬られた寿安の墓所は北山不動と呼ばれて、北山不動の信仰習俗が残っている。

漢方医学を語る上に北山寿安のような唐人出身の医師を取り上げる必要がある。しかし、これまで北山寿安の在日医療活動（医学的な文

化伝播功績）に関する問題を、広範囲にわたって俯瞰した研究と、その評価は管見の限り極めて少なく、その医学思想については、未だ論究の及んでいない点もあり、関連する日本漢方への影響・役割、医学理論・思想などの研究もまだ十分なものとは言えない。それ故、本書では、『近世畸人伝』（1790年）、『皇国名医伝』（1851年）、『先哲医話』（1880年）、『近古禅林叢談』（1919年）、『浪華人物誌・巻2』（1920年）、『近畿墓跡考・大阪の部』（1922年）、『皇漢名医和漢薬処方』（1927年）、『日本の漢方を築いた人々』（1994年）などを読み解くことで、寿安の生い立ち、時代背景、医学知識の形成過程、医学著作を複眼的に捉えて寿安の生涯の全貌を明らかにしたい。

寿安の生きた時代、当時の日中の思想状況も視野に入れて北山寿安の革新的医論形成のプロセスを論じ、さらには、その業績を反映する『北山医案』の現代語訳及び解説を行って彼の臨床の実像と医療思想を明らかにしたい。また、これを文化現象として考えて、医学に限らず儒学や史学、日中交流・貿易などの面における史的、文化的角度からも視野に入れて考察したいと考える。

⁸ 浅田惟常（栗園）『皇国名医伝』丁字屋平兵衛、1873年；浅田宗伯『先哲医話』巻上、松山良禎、1880年。

第一節 先行研究

北山寿安は江戸前期から中期にかけて長崎と大坂で活躍した唐人医師としてその名前が関連史料に記載されているが、医療活動及びその研究は管見の限り少ない。江戸時代前期の中国においては「漢民族の明王朝から満州族の清王朝への混乱期」であったことを背景に、日本にとっては中国から医薬文化の影響を受け続けてきた。幕府は長崎貿易を通じて中国から大量の薬種を輸入していた。北山寿安の父馬栄宇は薬種商として来日した可能性が高いといえる。従来、日中間の薬種貿易及び文化交流に関する研究は多いが、来日唐人医師及び北山寿安に関する研究は少ない。日中間の医薬交流と貿易については、池田嘯風『日本薬業史』(1929年)、清水藤太郎『日本薬学史』(1949年)、大庭脩『近世日中交渉史料集(1)～(4)』(1974年～1995年)と『江戸時代における唐船持渡書の研究』(1967年)、宮下三郎『長崎貿易と大坂輸入から創薬へ』(1997年)、羽生和子『江戸時代漢方薬の歴史』(2010年)などが主に挙げられる。このうち、宮下三郎氏は村上家文書「薬種荒物寄」の分析をもとに、洋薬・漢薬・顔料・金属の輸入状況とその流通経路を解明し、長崎と大坂道修町との特殊な相互関係の実情を具体的に示した。また、羽生和子氏は江戸時代にどのような唐薬の薬効が期待されて輸入されたかを歴史学と薬学との両面から焦点を当て論述している。

一方、中国の先行研究では、馬伯英・高晞合『中外医学文化交流史 - 中外跨文化伝通』(1993年)が中国医薬の日本伝来記録が徐福渡日から始まったことを示し、遣唐僧恵日の唐での医学修業経歴、唐の律令制に模倣した日本医事制度、鑑真の日本での医薬伝播などを論述し

た。傅維康『中国医学通史』(2000年)は、中国では、初めての大型医学通史書籍で、医学の起源から1995年までの医学の発展史を概説し、中医学、西洋医学、チベット医学、モンゴル医学、少数民族医学などを含み、明・清時期の中日医薬貿易・交流状況を論及した。史世勤『中医伝日史略』(1991年)では、仁徳天皇の時代、朝鮮半島の韓医方が日本に伝入りし、允恭天皇、雄略天皇(5世紀)、欽明天皇(6世紀)の治世における朝鮮医師の治療を求めた。その際、朝鮮は金波鎮漢紀武などの医師を日本に派遣して韓医方による治療活動を行った。また、当時の韓医方は中国医方を中心とした医療システムであったとも述べられている。中国古典医学の日本伝入経緯、日本漢方の発展史などが詳しく論述され、日中医学交流史及び漢方の研究に参考とすべき研究である。

来日唐人医師についての研究は、井上清『日本の歴史(中)』(1965年)及び辻善之助『日本文化史』(1948年～1956年)があり、ここでは、明・清の渡日医師である陳順祖(1322年～1395年)、陳明德(1607年～1674年)、何欽吉(生年不明～1658年)、王寧宇(1558年～1660年)、戴曼公(1596年～1672年)、馬榮宇(不明～1654年)などが紹介されている。郭秀梅氏による「清医胡兆新の来日記録と業績」(『日本医史学雑誌』、2001年)には胡兆新(1746年～没年不明)に関する史料、来日の経緯、長崎における医療活動が論じられる。『胡氏方案』(1804年)にみる医療活動、幕府医官との問答録、「問答録」の分析(医事制度、治療、難治の症例、風俗風習など)、幕府医官の長崎遊学、「筆語」(清医記録)の成立と内容が紹介され、『太田南畝全集』に収録された胡兆新に関する記事、即ち、手紙による難病についての質問、交遊と詩文、書や心境について詳しく述べられてい

る。史世勤「明清時期中国赴日医師及其对日本漢方医学的影響」(『中国科技史料』、1994年)では、明・清時期に中国から日本へ渡った27人の医師を概説し、彼らの事績と日本漢方への影響を述べ、中国医師たちの渡日の理由などについての新たな検証を行った。葉桔泉「中日友好医学交流史話」(『浙江中医学院学報』、1981年)、吳中平「陳孝銀明清時期江南傷寒名家对日本漢方医古方派的影響」(『上海中医薬大学学報』、2000年)、俞雪如「江浙医文化对日本漢方医学的影響」(『浙江中医雜誌』、1995年)は、明・清時期における江南傷寒名医が日本古方派に与えた影響を論じている。それらは、どちらかといえば、渡日中国医師の概略的紹介であり、具体的な個々の人物による経緯、在日医療活動、医学思想についての詳細分析は行われていない。

北山寿安についての記述資料は多いが、単に簡単な紹介に限られ彼の治術、医学思想などの論説は少ない。記述に関しては、伴蒿暎『近世畸人伝』(1790年)、岡本撫山『浪華人物誌・巻2』(風俗絵巻図画刊行会、1920)、森大協『金庫禅林叢談』(増強署員、1919年)、鎌田春雄『近畿墓跡考・大阪の部』(大鑑閣、1922年)、石原保秀『皇漢名医和漢薬処方』(鳳鳴社、1927年)、近世漢方医学書編集委員会編『日本の漢方を築いた人々』(医聖社、1994年)などが挙げられる。また、浅田宗伯(1814年～1894年)『皇国名医伝』(嘉永四年序校本・高美屋甚左衛門等刊本、鹿児島大学付属図書館蔵)、『先哲医話』(松山良禎出版、1880年、早稲田大学図書館蔵)にも北山寿安についての紹介がある。このような功績が挙げられるが、内容は限られている。数少ない先行研究の中では、安井廣迪編集・解説『近世漢方治験選集5・北山友松子』(1985年)がある。同書には北山寿安の出自、医学の経歴と背景、治験の解説、著書『北山医案』と『増広医方口訣

集』について紹介されている。同書はこれまでの研究の中では最も詳しい研究書といえる。しかしながら、北山寿安の具体的な生年、医術学習経歴、医業活動経歴などについては文献史料そのものが乏しく、必ずしも論究しきれてはいない。2011年中国天津で行われた中医学シンポジウムにおいて、安井廣迪氏は「北山友松子の医術」⁹を発表し、北山寿安の出身と医術学習略歴、医学背景、部分治験解説を紹介している。そのほかでは、加島雅之が『漢方と診療』に「昔の名医に聞いてみよう 北山友松子の腹痛治療、血症治療、症状に縛られない治療、升麻葛根湯の使い方、八味丸の使い方」として掲載された(2014年～2015年)。¹⁰ そのほかにも、中野操『大坂名医伝・北山寿安と風吹不動』(1983年)、近世漢方医学書編集委員会編『日本の漢方を築いた人々』(1994年)、町泉寿郎「日本の名医500傑(27)」(2002年)、小曾戸洋「目でみる漢方史料館(28)北山友松子の遺墨」¹¹(1990年)、飯嶋和一『出星前夜』(2013年)がある。2008年度

⁹ 張伯礼編集『中国天津第五届国際中医学術研討会・暨第九届国際鍼灸学術交流會論文集』(天津中医学大学暨中国伝統医学国際学院出版、2011年、115-117頁)を参照。

¹⁰ 昔の名医に聞いてみよう 第1回 北山友松子の腹痛治療『増広医方口訣集』(『漢方と診療』Vol.4, No.4, 東洋学術出版社、2014年、250-257頁)、「昔の名医に聞いてみよう 第2回 北山友松子の血症治療『増広医方口訣集』(『漢方と診療』Vol.5, No.1, 東洋学術出版社、2014年、66-72頁)、「昔の名医に聞いてみよう 第3回 北山友松子の症状に縛られない治療『増広医方口訣集』(『漢方と診療』Vol.5, No.2, 東洋学術出版社、2014年、154-159頁)；「昔の名医に聞いてみよう 第4回 北山友松子の升麻葛根湯の使い方『増広医方口訣集』(『漢方と診療』Vol.5, No.3, 東洋学術出版社、2014年、238-244頁)、「昔の名医に聞いてみよう 第5回 北山友松子の八味丸の使い方『増広医方口訣集』(『漢方と診療』Vol.5, No.4, 東洋学術出版社、2015年、346-354頁)。

¹¹ 小曾戸洋「北山友松子の遺墨」『漢方の臨床』第37巻02号、1990年、78-79頁。

の大佛次郎賞を受賞した『出星前夜』は、北山寿安を島原の乱の生き残りとして着想した物語である。主人公となっている有家村の若者、矢矩鋏之介の通称は寿安であり、座して死を待つより、森の教会堂跡に籠もって大人達に反抗の姿勢を示し、村の大勢の若者や子供らが同調して、騒ぎを引き起こした。しかし、これらの先行研究は『近世畸人伝』のような紹介にとどまり、具体的に寿安の長崎や大坂での活躍経歴、臨床治療状況などは触れていない。そこで、本書では寿安の長崎や大坂での医療活動及び医学知識の形成過程、革新的医論・思想を明らかにしたいと考える。

第二節 本書の構成

本書は以下の四章から構成される。第一章では、北山寿安の生きた時代背景について、第一節に明末期の中国医薬学、第二節に江戸時代前期の日本漢方、に分けて論述する。北山寿安の生きた時代は中国の明末清初の時期にあたる。明清時代の中医学では、金元時代の医学理論を基盤としながらその拡充、完備が図られた。幅広い学術論争が行われ、各学科の内部で違う学術派が現れた。伝染病及び非伝染病への認識が以前より高くなり、多くの本草学、方剂学書籍も次々と出版された。一方、鎖国下の日本では中国(明)の医学を熱心に受容し、多くの中国医薬書籍を輸入してその約三分の一が和刻されたという。田代三喜(1465年～1544年)は最先端医学だった金元医学、特に李朱医学を日本に持ち帰ったあと、弟子がそれを広め、日本化し、江戸前期に興隆を極めた漢方医学の後世派の礎を築いた。「尊経復古」思潮の影響下で、陰陽学説、五行学説、『黄帝内経』などを批判し、古典

『傷寒論』を尊重する漢方古方派が誕生したことなどを紹介する。

第二章では、北山寿安の生い立ちについて、第一節に寿安に関するいくつかの疑問解明（生年と名前間違い）、第二節に長崎の居住時期（長崎唐通事との関わり）、第三節に大坂での活躍を論述する。北山寿安の生年及び名前に関する資料記述はまだ明らかになっていない。本節で関連史料を調査・分析したうえで北山寿安の生年及び正確な名前を明らかにする。北山寿安は長崎で生まれて、大坂に行く前に約20年間長崎で生活した。長崎で彼は唐人の社会で育てられ、日中両国の言葉を理解し、いち早く最新の中国からの医薬情報を受け取ったと思われる。長崎では、彼は師匠の戴曼公と化林性僕に出逢って漢方知識を学んだ。長崎は寿安の医学理論と思想の形成期であるため、第二節に寿安の長崎での全貌を明らかにする。寿安は三十歳になる前に小倉藩医の身分を捨てて大坂に出た。第三節では主に寿安の大坂での医療活動を明らかにする。

第三章では、北山寿安の漢方思想の形成過程について論説する。主に「父馬榮宇からの影響」、「北山寿安の師」、「福建地方閩医学の影響」の三節から北山寿安の医学知識形成について父馬榮宇、師匠唐人禅僧化林、戴曼公、福建地方閩からの影響下に説明する。第一節にのべる父馬榮宇は北山寿安の第一人者の医学の師として彼の幼いころから中国医薬学知識及び福建地方の閩医学の知識を教えた。生薬の修治、選別、炮製、調合などの様々の面から彼に影響を与えたと考えられる。第二節では師匠の禅僧化林、戴曼公のことを紹介しながら彼らの医学経歴や医学思想も触れて北山寿安への影響を究明する。第三節では北山寿安は長崎で生まれて、幼いころから父馬榮宇、閩医学の薫陶を受ける一方同じ福建省出身の師禅僧化林からも閩医学の教えを受

けたと考え、その医学形成と閩医学の関わりを究明する。とくに、彼は幼いころから長崎の唐人社会で成長したが、当時、同じ福建省出身の唐人医師が多くいたため、彼らの北山寿安への影響も強いことが想像できる。生家の影響で彼は幼いころから漢方医学に親しみ、これを時代考証とともにわかりやすく説明する。

第四章では、著作にみる寿安の漢方思想、北山寿安の数多くの医学遺作から『北山医案』、『医方考繩愆』、『増広医方口訣集』を訳して詳しく分析する。北山寿安は明代における『傷寒論』研究をいち早く察知し、その著書に反映させているため、著作の分析をした上で北山寿安の医術と診療理念・医学思想を究明する。『北山医案』（全3巻）は北山寿安の孫である北山寿庵（道脩）が延享2年（1745年）に編輯した北山寿安の生涯における部分的な臨床診療記録（カルテ）である。各医案の記述が総体的で、脈証の記録も詳しい。北山寿安の診療筋道も含まれて『黄帝内径』、『難経』、『神農本草経』などの古典に関する論述も入っている。経典の論述により、北山寿安の弁証論治¹²の指導思想を反映している。『医方考繩愆』は中国明の時代の医師吳崑（1551年～1620年）が書かれた中国最初の処方解説書『医方考』（1584年）をもとに北山寿安が後に繩愆¹³したものである。『医方考』は中医学における歴代の常用の方剂700余種を疾病に応じて44類に分けて解説したもので、方剂の作り方や治病の理論に詳しく論述

¹² 中医学における四診の所見と八綱・臟腑・病因・病理機序などの基礎理論から、患者の症状を総合的に分析して病変の性質・帰属を判断し弁別することを「弁証」といい、弁証をもとに治療の方針を定め処置することを「論治」あるいは「施治」という。（焦樹徳『症例から学ぶ中医弁証論治』東洋学術出版社、1991年；李振吉『中医薬常用名詞術語辞典』中国中医薬出版社、2001年）を参照。

した方剤書である。『増広医方口訣¹⁴集』は同じく前述時代医師呉崑の『医方考』をもとに、曲直瀬玄朔の弟子長沢道寿（生年不明～1637年）が解説をした『医方口訣集』（日本最初の処方解説書）から北山寿安が頭注¹⁵を加えたものである。これらの名医の著作を縄愆したり頭注を加えたりしている点も北山寿安の医術の優れたことがみえる。

むすびでは、北山寿安の後継者（子孫と弟子）に言及し、彼の医学思想の特徴、現実意義及び医術、医徳について論究する。北山寿安は江戸前中期における有名な唐人医師であるが、前述のように彼の医術と医論については、未だ論究の及んでいない点も多いに思われる。そこで、文献学的に寿安の著作を読み、その治療特徴と方法に沿って、その医術と医論、医徳の認識論的・存在論的意義に鑑み、漢方歴史学的、文化的な意義を追究し、その医療の実際を解明し、その医術と医論の特質について論じたい。

子孫の北山晋陽は中国名が馬道良で、江戸時代中期の画家である。寛政3（1791）年に幕命を受けて司天台にあるブラウ製の天地球儀を

補修するなど、いずれも蘭学にかかわりが深く、谷文晁（1763年～1841年）に大きな影響を与えた画家としても知られている。孫の北山道脩は大坂の開業医で、祖父北山寿安の「医案」を編集して延享2（1745）年に刊行した。北山李庵は江戸時代前期から中期にかけての医師として北山寿安に医術を学び、その医方・秘術をうけた後、北山姓をついだ。姫路藩主榊原政邦の侍医をつとめたことがあるが、のちに大坂で開業した。北山寿安の子孫及びその門人は、彼の医術を受け継いで開業した人物や、画家になった人物もいた。それぞれ各自の分野で業績を上げて日本漢方医学の発展に大きな影響を与えたと考えられる。

以上四章では、「臨床記録」としての『北山医案』、『医方考縄愆』、『増広医方口訣集』に焦点を当てたが、これによって、北山寿安の漢方史に加え、現代医学におけるその意義をも考えてみたい。また、北山寿安に関する先行研究を踏まえた上での研究を深め、中国医学・日本漢方医学の全体に俯瞰して、漢方史学上に文化的、互惠と国際交流の角度からの北山寿安の再評価を試みたい。

¹³ 縄は大工仕事用の墨縄、墨糸である。後に基準、規範、法則などの意味が派生され、一定の基準に照らして判断した上で是正する意味になった。愆は欠点、過失、過ちなどの意味である。（『現代漢語辞海』編集委員会『現代漢語辞海』中国書籍出版社、2003年）を参照。

¹⁴ 医学・診療上のポイントを端的に表した言葉。日本の漢方医学では非常に重要視される。後代の口訣になると理論的な部分がより排除され、具体的な事象をいうものが増えるようになる。伝統的な中国医学が「陰陽」に代表される抽象的な概念を用いて、きわめて具体的な事象の連続である人体の生理・病状の把握を行うのに対して、具体的な方法論である「口訣」を多用するのが日本の漢方医学の1つの大きな特徴といえる（李振吉『中医薬常用名詞術語辞典』中国中医薬出版社、2001年）を参照。

¹⁵ 書物上欄の注。

第四章 北山寿安の著作にみる漢方思想

『近世畸人伝』には「門人の請によりて著す、刪補衆方規矩、評議纂言方考、増広口訣集等、皆四十未滿の所為也。後又、方考繩愆あり。凡著述、他の書によりて吾意を述るものにして、一家の成書なし。是即一家の所立なるべし」¹²⁴と記されている。北山寿安には自ら書いた著作がない。

『北山医案』序文に「然但取前人所著之書。刪補之。繩愆之。而不著一家之書者。何哉。曰吾聞諸江之島氏俊安老人。往自弟子詰問之。吾翁曰。医理遂遠。至奥難原。一言一句。尽繫于死生。宣刪定自用之方出而可也耳。先賢之大經大法。布在方冊。吾何復贅之耶。蓋翁不著一家之書者。従是故也（中略）・・・」（前人の書きあらわした書物を取り入れて削ったり補ったり直ったりすることだけで自分の著作を書いていない。なぜかと尋ねると、医学は奥深くて難しい。わずかな言葉が人の命に係わる。用いるときは前人の処方を選別して刪補するだけでよい。先賢らの治療方法や原則はすでに書物にあるので私には改めてくどくど述べる必要はないと答えた。これは我が師が自分の著書を著さないゆえである）とある。

先賢の大經大法はすでに書物に記載されているから自分は改めて書く必要はないと言った。従って、寿安の書物には過去の医学書に自分の意見をいれて注釈する形でできたものが多い。現在、残されているものでは、延享2(1745)年『北山医案』全3巻、延宝9(1681)年『増広医方口訣集』、元禄10(1697)年『医方考繩愆』全8巻、延宝7(1679)年『纂言方考評義』全5巻、延宝5年(1677)『刪補衆方規矩』全3巻、安政4年(1857)『時習録』(写)全10巻が挙げられる。

¹²⁴ 伴蒿暎『近世畸人伝』岩波書店、1940年。

『北山医案』は孫の北山寿庵（道修）が延享2（1745）年に寿安生前の数多くの医案から数十の医案を取り出して纏めたものである。上、中、下三巻からなっている。上巻には詳しく寿安の診療、処方過程を記録されている。中巻は紀州大納言徳川頼宣の難病「動気上衝」を治療する案である。下巻は日常よく罹る病気の治療処方を記録するものである。

『増広医方口訣集』は『新增愚按口訣集』とも言われる。この書は中国明の時代医師呉崑（1551年～1620年）によって書かれた中国最初の処方解説書である『医方考』（1584年）をもとに、曲直瀬流医学の第3世代にあたる名医長沢道寿（生年不明～1637年）が参考にして日本最初の処方解説書『医方口訣集』を編集した。その後、中山三柳（1614年～1684年）は新たに増やして、さらに北山寿安が頭注を加えて『増広医方口訣集』となった。

『医方考繩愆』は同じく『医方考』（1584年）をもとに寿安が繩愆（間違ったところを直し、不足部分を補充する）したものである。『医方考』は中医学史上最初の方剂論の専門書として、歴代常用方約700首を病症により72門に分類し、収録している。中風、傷寒、感冒、暑湿、瘟疫など44類の疾病について詳細に記載されている。各方剂の組成、方義、効能、配合についても明らかにしている。方剂学の学習における重要な書籍である。

『纂言方考評議』（1679序刊）は江戸前期の医家、古医方の先駆者である名古屋玄医『纂言方考』をもとに、寿安が評議して堀元厚甫が増改したものである。『刪補衆方規矩』（1677年）は岡本玄治（1587年～1645年）が口述し、弟子が編纂した『衆方規矩』をもとに、寿安が注や増補・解説を加えたものである。『衆方規矩』に記載されて

いる処方の70%は襲廷賢の医方書からの引用とされる。

『時習録』は北山寿安が門人俊安に医術を伝えたもので、孫北山寿庵（道修）が記録整理したものである。『時習録』の書名は『論語』冒頭の第一節「学而時習之（学びて時にこれを習う）」から取られていると思われる。本章には北山寿安の多くの医学著作から以下の『北山医案』、『医方考繩愆』、『増広医方口訣集』三冊を取り上げ、読み下し・現代語訳・解説をつけ、北山寿安の医学思想を読み取ることにはしたい。

第一節 『北山医案』解説と解説

『北山医案』は北山寿安が1701年に亡くなった後、孫の北山道修（別名北山寿庵）が1745年に整理、編集した治療症例である。ここでは北山寿安の診療の筋道が述べられている。中でも『黄帝内経』『難経』『神農本草経』などの漢方古医典の内容に言及されている点が注目される。北山寿安は古典の論述を自分の「弁証施治」の根拠にすると同時に実際の治療によって古典の正確性を論証した。同書は上、中、下の3巻から構成されている。巻上は北山寿安の生前の多くの医案から「治病求本」「弁証施治」の治療思路を表す16症例を取り上げたもので、「気郁食滯」「好酒失眠」「卒中險症」「氣中卒倒」「痰喘斑疹」「瘡疾傷胃断食」「飧泄」「泄瀉」「瘡後肝経虚寒」「痔疾下血」「怒氣郁結浮腫」「縦飲冷酒吐血」「瘡瘍」「背愈発瘍」「背瘍癰毒」「腰脊生瘍」からなり、詳しく解説を付けている。¹²⁵ 巻中の「治某候病之

¹²⁵ 伍悦・林森校閲『北山医案』（中国学苑出版社、2008年）を参照。

案」は彼が紀伊藩主大納言徳川頼宣公に治療を与えた症例である。治療は約一か月半にわたり、藩主の病状変化過程及び病状に合わせる調薬、処方、調薬・処方に関する他の医師との間での弁論などの経過が述べられている。その治療をみることで、北山寿安の医学的基礎と優れた医術を読み取ることができる。

巻上「気郁食滯」症例では、藩主は寿安に「投薬が同じだが、治療効果はなぜそんなに異なるか」と問う。これに対し、寿安は「岐伯がいう。治療する前にまず疾病が起きる臓腑を明確し、軽い邪気を駆除する。その後、営衛の気を調節する。実証を瀉し、虚証を補する。しかし、先に身体と情志の苦樂を察してから治療方法を定めるべきである」と答えた。寿安は『黄帝内経』の「靈樞・大惑論第八十」の古典を引用して治療の原則と前後順次などを説明した。寿安は『黄帝内経』を熟読し、治療する際には、「治則」及び「治療順次」などに従う考えを示した。

「好酒失眠」の症例に、北山寿安は『黄帝内経・靈樞』に記されている「半夏秫米湯」を与えている。「千里以外から流れて来た水（長流水、江河・溪澗の水）8升を使い、容器に入れて数回上から落として泡立てた清水（甘瀾水）を5升、葦の薪で加熱する。沸騰したら秫米（コウリヤンの実）一升と炮制した半夏五合を入れて、ゆっくり炊き込む。半分になったら滓を取り除いて服用する。毎回お椀一杯、一日三回或は三回以上、効果が見えるまで飲む。初期の場合は、飲んだらすぐ安静して寝る、汗が出ると治る。長く罹ったものでも三日間飲むと治るはずである」¹²⁶と記されている。ここで寿安はとくに水の

選択と煎薬方法を強調した。まず、水を容器にいれたら数回上から落として泡立てた清水を使うこと、もう一つは葦の薪で加熱して沸騰した後、生薬をいれることが大事である。一般の煎じ方は生水に生薬をいれて沸騰させるが、それは間違っていると指摘した。そこから北山寿安が生薬の調合法に熟知することが分かる。とくに調薬するときには古法に従わうべきであるという考え方が見える。

「背瘍癰毒」の症例では、寿安は「営気は『本』である。『本』が逆行すれば湿気に侵入し壊される。そうすると瘡瘍が生じる。治療の際、先ず営気の機能を整えるのは治療の『本』である。『標』と『本』をはっきり承知し、これを直さないと邪気を伏せることができない」と述べている。北山寿安は病気を治すには、必ずその症状（標）だけでなく、本質の病因（本）を治さなくてはならないという「治病求本」の治療法則を述べている。

巻下は「風勞」「吐瀉」「肛癰」「内痔」「淋濁」「目疾変症」など58の治療症例からなっている。多くの症例では患者の数回の診療過程が記述され、違う病気でも同じ処方を与えた症例もあり、同じ病気でも違う処方を与えた症例もある。診療の過程中、数回処方を変えた患者の症例もある。そらの症例をみることで、北山寿安の治術・医学思想の一端が読み取れる。たとえば、ある男子の「耳鳴身痛」を治療した際、北山寿安は先ず「附子理中湯」を処方し、次に「六君子湯加天麻」を処方してその後、「六君子湯加天麻」に乾姜と黄柏を加えた処方を出した。「結気冲動」「羸弱」「咳嗽」「傷食痞気」「胸脇動気」などの症例にすべて「二陳湯」を用いた。すべてその病状に応じて変える「加減変方」を使ったのである。病症に対して人体の体質や年齢の相違に基づいて適切な治療方法を決める「隨機制宜」及び「治病求

¹²⁶『北山医案』巻上・症例2を参照。

本」の思想がここに読み取れる。

巻末には独立老人用薬方が付録されている。独立老人がある患者の黄痘症を治療した症例で、8月8日から9月11日までの用薬の始末が記録されている。その中から独立老人の診療、用薬方法などを見ることができる。寿安の言ったように独立老人の脈論に関する論説が洗練されていて、その診療過程からも見られる。文中に「独立老人は中国の福建の人で、ある禅師と共に中国から来て長崎に居住していた。『靈樞』『素問』『本草』に精通し、医術も優れている」記されている。実際にこの独立老人は北山寿安に医術を教えた戴曼公（1596-1672）である。明の名医龔廷賢の弟子で、『万病回春』を日本に普及し、人工種痘術を日本に伝えた第一人者である。

それらをみることで、彼が病気をどのように考え、どのようにして処方方を施したかということを知ることができる。以下は『北山医案』の中から寿安医薬思想の解説に必要と思われる医案原文を抜粋し、これに現代語訳、解説を加えたものである。原典は北山友松子〔原著〕・北山寿庵 輯『北山友松子医案』巻之上・中・下・附録、出版事項：心齋橋筋博労町（大坂）高萩安兵衛、延享2（1745）年（早稲田大学図書館蔵書）、北山友松『北山医案（中国語）』（皇漢医学叢書・精編増補版）（学苑出版社、2008年）によった。

【北山醫案序】（原文）

予隠于浪華城南邨也。有客敲柴扃¹²⁷。乃謂予曰。醫也尚矣。原于岐黃。派于諸家。後世源遠派分。論辯愈備。經義愈濶。是以貴陰者。

¹²⁷ 扉についている金輪。

特虞履霜之主。貴陽者。偏恐龍雷之亢。夫陰陽乎秘之間。各窺一斑。而不能見其全者也。苟非從明師講究之。則焉能獲遡于岐黃之本源耶。友松先生神乎醫者也。左長沙。右東垣。源究素靈之蘊。其所著衆方規矩刪補纂言方考評議。增廣医方口訣集。医方考繩愆。多所發揮矣。然但取衆人所著之書。刪補之。繩愆之。而不著一家之書者。何哉。曰吾聞諸江之島氏俊安老人。往自弟子詰問之。吾翁曰。醫理邃遠。至奧難原。一言一句。盡繫于死生。宜刪定自用之方出而可也耳。先賢之大經大法。布在方冊。吾何復贅之耶。蓋翁不著一家之書者。从是故也。客曰已聞命。然者秘訣心法寧將莫遺于後昆為焉耶。何為壽于梓。不與衆同焉。請不已。于是摘治驗數十條於遺稿。錄之曰北山醫案。承先大父及物之仁。則亦不教私也。儻山野之陋。湖海之遠。初學之士。於被陰陽攻補。庶乎知所其全濟矣。遂命客廣其傳焉。

延享乙丑重陽自孫道修謹書于北山仁壽庵

【北山醫案序】（現代文訳）

予は浪華城南にある村に超然と隠れ住んでいる。ある客は扉についている金輪を叩いて我に曰く：医の由来が既に久しく、「岐黄の術」より始まり、のちに多くのさまざまな家門に分かれて生じた。後世になるとさらに多くの説や家門が派生された。論争が多ければ多いほど経義が更に混乱する。いわゆる陰病とはまるで霜を踏むようになる。陽病とは恐らく龍雷の火（陽気）が過剰に興奮することになる。陰病か陽病か両者の区別は非常に微妙で、多くの医者はその一部分しか見ることができず全体はわからない。たとえ、すぐれた先生の下に学ばずしてどうして岐黄（医学）の術の根本的奥義がわかるであろうか。友松先生は不思議な医術を持つ医者である。仲景医学にも東垣医学に

も優れて『靈樞』、『素問』の奥義にも詳しい。彼が著した『衆方規矩』、『刪補纂言方考評議』、『増廣医方口訣集』、『医方考繩愆』などはすべて自分の診療実践より得たものである。但し、多くは他人が著した書物を刪補するか、または繩愆したもので、自分の手で書いた書物は少ない。なぜであろうか。江之島氏俊安老人や彼の弟子らに聞いてみると「医学の理論と術は奥が深く、難しい。一言一句でも人の生死にかかわるもので、自分自身の実践で得た処方を書き込んで用いればよい。そのうえ、先賢の大経大法はすべて書籍に載せられたので私はこれ以上くどくど述べる必要はないだろう」と答えたという。それは友松子が自分の著作を著さない理由であり、客はその話を聞いて黙っていたが、長年の診療実践で得た秘訣や心得などをまとめて本として出版し、後世に残さないと遺憾なことになると数回も友松子に説得したが、納得できなかった。それで、数十例の治療医案を遺稿に書き留めて『北山医案』という書名を付けた。先大父の遺志を引き継ぎ、個々の人に教えず、広く伝えて緊急な時期に助けられるものとして用いる。とくに、初心者向けの物として役に立ちながら陰陽攻補などの治療がわかる。それで、皆に広く伝えると告げた。

延享乙丑年重陽の時、孫の道修が北山仁壽庵宛に書いた。

北山醫案後序（原文）

醫道也、深妙不可思議、宜涉思量乎、議論紛紛難為一定也、夫北山醫案者吾藥王前逝、日用之煞活自在而吾人到自在之寶椀、達寶所之良導、醫學之眼目、經論之肝心也、一日先師矢島神人語予曰、吾先覺子友松苦心于醫經多年也、一旦豁開箇不思量底於思量、応為正使病魔換胃洗腸神清氣爽、所謂一丸清衆病、不假藥方得者也、信而、志斯道

者、思量此藥案一丸子於不思量應、則如龍澤水、如虎靠山如盧扁（扁鵲）醒上池水也、將使病者絶后再甦也、必矣、唯恐後世小子徒認水月而為真証也、於是乎跋。

延享乙丑立冬日無印居士元俊敬

書于北村之容膝軒

『北山医案』後序（現代文訳）

医道は奥が深く思いはかることができない。思いはかっても言葉で議論しても定説にはならない。『北山医案』に収録された診療記録はすべて日常の診療活動で使いこなした宝物で、医学宝所までの良い指導書であり、眼目でもある。また、経論の肝心でもある。ある日、先師の矢島神人は私に「我が先賢友松子は長年にわたり、医学経典を研鑽し、その道の奥義を極めていた。医学の奥義を会得し、豁然として悟り、まるで胃を洗浄し、腸を換えるように気持ちさがさわやかになる」と言った。いわゆる一丸で処方を使わずにすべての病気を一掃する方法である。この医案はまるで水を得た龍のように、山に放たれた虎のように、盧扁（扁鵲）が上池水を得たように患者の病気を根絶して蘇らせる。しかしながら、後世の弟子らは水中の月のような偽りの姿を真の証に見なすことを心配してこの後序を書いた。

延享乙丑年立冬の日に無印居士元俊が敬上

北村之容膝軒宛に書いた。

【凡例】（原文）

一 卷首所載一十余案。最多所發明。乃治病求于本之切要者也。故冠于初卷。以為子弟之楷式。

す、其性撲實剛毅其学問に於ける勇往直前人其進むを見る未た嘗て其退くを見ず、平素自ら修め人を教る常人及ふ能はざる所あり、享保十四年己酉閏九月二十五日没享年七十七墓は天王寺町天鷲寺にあり、碑文は徳積以實撰書は東竹堂なりと云」と。

北山寿安の子孫及び門人について、前述した北山寿庵、北山晋陽、北山寒巖、北山橘庵、北山李庵、北山七僧らが挙げられるが、弟子として集まったものは数百人に及んでいる。しかし、関連文献資料は見い出されていない。『時習録』に記されている門人俊安、『北山医案』に記されている門人元春甫、門人白雲軒については他に資料を得ておらず、事績も確認できない。江戸前期の主流医学であった後世派医学を受け継ぎながら、古方派が興隆した時代の影響も受け、1701年に逝去した寿安は後継者が段々減っており、その医系も絶えつつあった。

江戸末期までに空前の水準に達していた日本の伝統医学の業績は、相次ぐ大医家の逝去に伴い、価値を認められることもなく死蔵され、さらに医術は巷の書肆に流出していった。明治新政府は矢継ぎ早の西洋医学一本化政策を採り、独自の発展を遂げてきた日本の伝統医学とその業績は、その後復活するまで冬の時代を迎えた。

(二) 北山寿安研究に残された課題

本書では、北山寿安に焦点を当て、彼が生きた時代背景をたどり、当時の日中医学の歴史（儒学革新、医学流派の論争、医学復古運動、道三流医学の盛行など）を考察した。明朝末年、商業経済の発展や交通機関の発達により、地域間な人的移動と交流が頻繁となり、医師間交流と論争が活発になると、様々な医学流派が誕生した。印刷出版業の発展に伴い、多くの医薬学書籍が続々と出版された。北山寿安の

生きた時代は明末清初の大きな転換期にあり、戦乱による伝染病の盛行が温病学の誕生をも促進させた。それと同時に、戦乱を避けるため、多くの医師が来日し、中医学の日本伝播に大きな貢献を果たした。

一方、江戸時代には漢方医学が大いに発展し、民間に普及した。曲直瀬道三らは明医学の主流である朱丹溪学派の医学を日本に広めた。17世紀前半からの鎖国政策が施行されても中国との交流は断絶せず、長崎を通して大量に中国書籍が輸入された。18世紀以降には古方派が発展し、従来の医学を批判して「方証相對」という治療制度を創出した。

北山寿安の生年及び彼の長崎や大坂での医療活動はいまだ解明されていないところが多い。本書では、限られた史料ではあるが、寿安が寛永九年（1632）前後に生まれた可能性が高いと推測した。また、本書では、研究史上に北山寿安の名前は「北山寿庵」、「北山道修」、「北山道長」、「北山友松子」など多くあるが、このうち、「北山寿庵」と「北山道修」は寿安本人ではなく、孫の名前であることをも明らかにした。それと同時に漢方医学の変遷を通し、当時の日本と中国の医療状況も視野に入れ、寿安の業績と思われる『北山医案』、『医方考綱愆』、『増広医方口訣集』の現代語訳、解説を行い、その臨床実態を具体的にみる事ができたと考えている。考察したように寿安は医学理論面の造詣が深く、『黄帝内経』、『神農本草経』、『素問』、『靈枢』、『難経』、『脈経』などの医学古典は勿論、儒学の経典『中庸』、『孟子』などにも触れている。また、生理・病理・脈法に対する知識も広く、原文の間違いを正し、不足部分を補充した独特な論著であり、江戸後期の伝記として京都の文人伴蒿蹊（1733年～1806年）の筆になる人物奇譚集『近世畸人伝』（1790年刊）に「門人の請によりて所

著、刪補衆方規矩、評議纂言方考、増広口決集等、皆四十未満の所為也。後又、方考繩愆あり・・・」の記述がある。その記述から見れば、寿安は四十歳未満のとき、すでに『刪補衆方規矩』、『評議纂言方考』、『増広口決集』、『方考繩愆』などの論著があるとされている。『刪補衆方規矩』は寿安が『衆方規矩』の内容を削除し、補足したものである。『評議纂言方考』は『纂言方考評議』と言われ、寿安が名古屋玄医『纂言方考』を評議したものである。『醫方考繩愆』と『脈語繩愆』も寿安が（明）呉崑『醫方考』と『脈語』にあるまちがいや欠点を改め直したものになる。まさに『近世畸人伝』に述べられているように「凡著述、他の書によりて吾意を述るものにして、一家の成書なし」であった。

寿安は臨床治療の面においても豊富な経験を持ち、病を治するには古方を尊重するが、一方的に踏襲するのではなく、臨機応変が治療方法として必要であると主張した。即ち、治療の法則や「医道」を守るうえで古方を守りながらもそれに拘泥せず、諸家の優れた点を取り入れて治療を与えることが必要であるとしたのである。

北山寿安の医学思想については、いまだ研究の及んでいない点が多くあるように思われる。とくに、長崎での経歴、大坂での具体的な医療活動の内容、福建地方閩医学が彼の診療思想にどれほどの影響を与えたのかなど、今後の検討課題としてあげられる。

北山寿安

1632（寛永9）年前後（推定）

長崎唐通事馬栄宇と丸山芸者樋口氏の長男として長崎の出来大工町に誕生する。

1653（承応2）年以後（20代）

承応2年（1653）年、禅僧戴曼公が長崎に渡来した。その後、1660（万治3）年に戴曼公に出逢って本草医学知識を学ぶ。

1660（万治3）年（20代）

同じ福建出身の禅僧化林性供が、長崎に渡来し、禅僧化林性供から仲景医学奥義を学ぶ。その後、しばらく小倉藩医原長庵の下で日本流医学を学んで一時的に小倉の藩医になる。

1660（万治3）年10月～1661（寛文元）年元旦

紀州大納言徳川頼宣の「動気上衝」難病を治療する。

1662（寛文2）年前後（30代）

小倉藩医を辞めて大坂に向かい、逃禅堂という医所を開く。

1680（延宝8）年『医方口訣集』を増補し、1681（延宝9）年『増広医方口訣集』として刊行される。

1696（元禄9）年冬至『医方考繩愆』に序文を書く。

1697（元禄10）年5月吉日に『医方考繩愆』が刊行される。

1701（元禄14）年3月15日 死去、およそ65歳。

元禄14年（1701）3月3日に大坂大平寺内の不動明王像下の石室中にこもり、読経しながら鐘を叩いて入定する。その鐘の音が絶えたのは15日であったので、人々はその日を北山寿安の命日とした。

【参考文献】

A 日本語文献書籍

- 1 浅田宗伯『皇国名医伝』丁字屋平兵衛、1874。
- 2 浅田宗伯『先哲医話』東京府松山良禎出版、1880年。
- 3 青木歳幸『江戸時代の医学—名医たちの三〇〇年』吉川弘文館、2012年。
- 4 秋月辰一郎ほか監修『長崎事典産業社会編』長崎文献社、1989年。
- 5 今井秀『近世の医療史』宮帯出版社、2015年。
- 6 岩生成一『新版・朱印船貿易史の研究』吉川弘文館、2013年。
- 7 石村喜英『深見玄岱の研究：日中文化交流上における玄岱伝と黄檗独立禅師伝』雄山閣、1973年。
- 8 石原保秀『皇漢名医和漢薬処方』鳳鳴社、1922年。
- 9 飯嶋和一『出星前夜』小学館文庫、2013年。
- 10 石田秀美『中国医学思想史』東京大学出版会、1992年。
- 11 池田玉郎『日本薬業史』薬業時論社、1929年。
- 12 上田三平『日本薬園史の研究』渡辺書店、1972年。
- 13 上田正昭『日本人名大辞典』講談社、2001年。
- 14 颯川君平『譯司統譜』神戸颯川君平出版、1897年。
- 15 大塚敬節・矢数道明責任編集『近世漢方医学書集成（6）曲直瀬玄朔』名著出版、1979年。
- 16 大塚敬節・矢数道明責任編集『近世漢方医学書集成（102）名古屋玄医』名著出版、1984年。
- 17 大塚敬節・矢数道明責任編集『近世漢方医学書集成（13）後藤良山・山脇東洋』名著出版、1979年。
- 18 大塚恭男・木村雄四郎・間中善雄『東洋医学大事典』講談社、1988年。
- 19 岡本一抱『医学切要指南』、たにぐち書店、2010年。
- 20 岡本一抱『医方大成論和語鈔』古典鍼灸研究会出版部、1974年。
- 21 岡本撫山『浪華人物誌・巻2』風俗絵巻図画刊行会、1920年。
- 22 太田勝也『鎖国時代長崎貿易史の研究』思文閣、1992年。
- 23 大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方書店、1980年。
- 24 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967年。
- 25 大庭脩『日中交流史話』燃焼社、2003年。
- 26 大庭脩『漢籍輸入の文化史』研文出版、1997年。
- 27 大庭脩『漂着船物語—江戸時代の日中交流』岩波書店、2001年。
- 28 大庭脩『徳川吉宗と康熙帝—鎖国下での日中交流』大修館書店、1999年。
- 29 小葉田淳『中世日之通交貿易史の研究』刀江書院、1969年。
- 30 鎌田春雄『近畿墓跡考・大阪の部』大鑑閣、1922年。
- 31 角田才治郎『続近世叢語』岡田屋嘉七、1845年。
- 32 角田九華『近世叢語』加賀屋善藏、1828年。
- 33 近世漢方医学書編集委員会編『日本の漢方を築いた人々』医聖社、1994年。
- 34 金成俊『漢方医療薬学の基礎—医療用漢方製剤・構成生薬解説』薬事日報社第3版、2012年。
- 35 金成俊『基礎からの漢方薬』薬事日報、2014年。
- 36 金成俊・丁宗鉄『方薬合編—生薬と漢方処方のエッセンス』医歯薬出版、1991年。
- 37 小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』大修館、1999年
- 38 小曾戸洋『新版漢方の歴史—中国日本の伝統医学』（あじあブックス）大修館書店、2014年。
- 39 小曾戸洋『中国医学古典と日本—書誌と伝承—』塙書房、1996年。
- 40 小曾戸洋『中国伝統医学 名医・名著小百科』（あじあブックス）大修館書店、2022年。
- 41 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍、1982年。
- 42 酒井シヅ『江戸の医学』ワニ文庫、2011年。
- 43 新村拓『日本医療史』吉川弘文館、2006年。
- 44 城島卓編・村山孝信『長崎事典（産業社会編）』長崎文献社、1989年。
- 45 新村拓『日本医療史』吉川弘文館、2007年。
- 46 清水藤太郎『日本薬学史』南山堂、1949年。
- 47 鈴木昶『日本医家列伝：鑑真から多田富雄まで』大修館書店、2013年。
- 48 庄司勝富『浪華百事談』吉川弘文館、2009年。
- 49 焦樹徳『症例から学ぶ中医弁証論治』東洋学術出版社、1991年。
- 50 杉本つとむ『日本本草学の世界—自然・医薬・民俗語彙の探求』八坂書房、2011年。
- 51 鈴木洋『漢方のくすりの事典』医歯薬出版株式会社、1995年。
- 52 瀬野精一郎・佐伯弘次等『長崎県の歴史』山川出版社、1998年。
- 53 宗田一『図説—日本医療文化史』思文閣、1989年。
- 54 宗田一『日本の名薬』八坂書房、1993年。
- 55 創医学会術部編『漢方用語大辞典』療原発行、1991年。
- 56 田中卓校注『新撰姓氏録』東京・神道大系編纂会、1981年。
- 57 竹内誠・深井雅海『日本近世人名辞典』吉川弘文館、2005年。
- 58 武田科学振興財団杏雨書屋『杏雨書屋所蔵医家肖像集』（財団法人）武

人名索引

【あ】

青木 128
 青木玄知 167, 197, 199
 秋田胡庵 347
 秋田屋平兵衛門 284
 阿佐井野宗瑞 45, 63
 浅田宗伯 1, 4, 11, 25, 44, 75, 89
 亜相公 330, 347
 阿部正弘 71
 有持桂里 44

【い】

飯嶋和一 12
 池田嘯風 9
 池田正直 96
 池田元安 52, 53
 医師青木 128
 石原保秀 11
 伊丹性有 197
 伊藤圭介 70

伊藤仁斎 42
 井上靖 10
 稻生恒軒 371
 稻生若水 37, 45, 70
 入江兼通 65
 岩崎灌園 46
 岩治勇一 65
 岩永宗故 70
 允賢 64
 隠元禪師 67, 68, 86, 90
 隠元隆琦 69, 91

【う】

曇林龔氏 257

【え】

頼川四郎八 71
 頼川入徳 94, 95
 恵日 9
 遠藤次郎 52

処方名

【い】

医王湯 263
異功五積散 218
異功散 240, 241, 336
胃苓散 174
胃苓湯 167, 171, 173, 174

【う】

右帰飲 31
右帰丸 31
烏薬順気散 307, 350
温清飲 36
温胆湯 120, 122, 123
温胆湯方 122

【え】

越鞠丸 194, 195, 358
越鞠丸方 194
益気四君湯 345
益気聡明湯 271

益気湯 328
閻氏和中散 143, 145, 146

【お】

黄耆建中湯 169, 171, 172, 173, 175
黄連丸 361
黄連解毒湯 332
黄連解毒湯加味四物 337
黄連湯 364
遠志酒 208, 211

【か】

改容膏 309
渴飲湯 325
葛花解醒湯 323
藿香正気散 135, 138, 139, 329
活絡丹 312
瓜蒌枳実湯 347
加味帰脾湯 255, 335
加味四物湯 362

加味逍遥散 315, 362
加味太乙膏 203, 204
加味平胃散 322
加味四七湯 269
加味六君子湯 357
加味龍薈丸 362

【き】

枳實導滯丸 315
稀涎散 298
橘紅湯 247
帰脾湯 116, 117, 118, 119, 191, 195,
241, 343, 344, 364
帰脾湯加減 192, 195
芎帰膠艾湯 319
芎帰湯 320
驚気丸 363
姜桂湯 247
響声破笛丸 36
杏蘇散 349
局方妙香丸 364
吃力迦丸 137

【く】

九味姜活湯 339, 340

【け】

啓脾湯 36
荊防俳毒飲 36
外台茯苓生姜湯 250
玄参升麻湯倍白芍薬 270
牽正散 307

【こ】

紅丸子 358
行気香蘇散 272, 342, 343
香砂平胃散 76, 119, 221
香砂平胃散倍加母姜 117, 118
香砂六君子湯 171, 173, 191
高良姜湯 170
五虎湯 36
五積散 218
五積散去麻黄加人参 215
呉茱萸湯 361
固真飲 252
固真飲子 267
固真飲人参湯 251
五味異功散 139, 199
五味異功散去人参 197
五苓散 174, 328, 333, 334
五苓散加橘核 267
滾痰丸 363

【さ】

截瘡飲湯 152
柴胡清肝湯 355
催生湯 218
柴平湯 152
柴朴湯 145
左帰飲 31
左帰丸 31
左金丸 361
三因方芎藭湯 320
三黄石膏湯 332
三化湯 311
三合湯 342

著者略歴

洪 涛 (HONG Tao)

1976年12月 中国陝西省武功県生まれ。

2001年7月 中国雲南大学外国語学部卒業。

2019年3月 関東学院大学文学研究科より博士号取得。

現在、中国昆明理工大学外国言語文化学部副教授。専門は日中言語文化、とくに近代における日中医薬学文化の比較研究。主な論文には「漢方医北山寿安—中日医薬学文化思想の比較研究」、「漢方医・馬榮宇の研究—北山寿安前史」、「江戸期漢方医・北山寿安にみる「有徳性」」、「江戸時代」に來日した唐人医師の史的考察」などがある。研究課題には中国国家社会科学基金である「中古医療と外来文化（日本語訳）」と中国雲南省人材養成研究プロジェクト「漢方医北山寿安と中日医薬文化交流」などがある。

監修者略歴

矢嶋道文 (やじま みちふみ)

関東学院大学名誉教授 主要著書：『近世日本の「重商主義」思想研究—貿易思想と農政—』（御茶の水書房、2003年）、『互惠と国際交流』（矢嶋道文編、クロスカルチャー出版、2014年）、『有徳論の国際比較』（矢嶋道文編著、クロスカルチャー出版、2019年）、『貝原益軒『大和本草』の漢方を読む』（近刊、大空社出版）

江戸の漢方名医 北山寿安の思想研究

2023年2月28日 第1刷発行

著 者 洪 涛 (HONG Tao)

発行者 川角功成

発行所 有限会社 クロスカルチャー出版 事業部

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-7-6

電話 03-5577-6707 FAX 03-5577-6708

<http://crosscul.com>

監 修 矢嶋道文

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

字数：27万5千

© HONG Tao 2023

ISBN 978-4-910672-16-8 C3023 Printed in Japan

ISBN978-4-910672-16-8

C3023 ¥6,000E

定価(本体6,000円+税)



9784910672168



1923023060006

北山寿安は、江戸時代に「浪花随一」といわれた漢方名医である。長年にわたり、長崎や大坂で活躍して漢方医学界に大きな足跡を残した。小林製薬、武田薬品そして塩野義製薬などの大手薬品メーカーの本社がある大阪・道修町の名前の由来は、北山寿安と関係があるという。本書では、寿安の生きた時代、当時の日中の思想状況も視野に入れて北山寿安の革新的医論形成のプロセスを論じ、さらには、その業績を反映する『北山医案』の現代語訳及び解説を行って彼の臨床の実像と医療思想を明らかにする。また、これを文化現象として考えつつ、医学に限らず儒学や史学、日中交流・貿易などの面において史的、文化的角度からも視野に入れて考察する。